

井上靖
わが文学の軌跡

聞き手

辻 篠田
邦 一
生 士

中央公論社

わが文学の軌跡

©1977

昭和52年4月15日印刷

昭和52年4月25日発行

検印廃止

著者代表 井上 靖

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2—34

わが文学の軌跡
目次

わが文学の軌跡

井上靖
篠田一士
辻邦生

第一部 青春と人間形成

四高時代の柔道部生活 自己を律する魅力ある
集団 詩との出会い 『流転』執筆の前後
新聞記者生活 戦時下の生活 最初の中国体
験 たえずノートをとる 自分を表現する
敗戦前夜のこと

7

第二部 現代小説

贅沢な遊びを…… 戦後の文学状況のなかで
『暗い潮』について 小説のおもしろさをめざす
『黒い蝶』と『射程』 作品批評について
事実とフィクションの間 『あした来る人』と
『氷壁』 作品独自の運命 人物の造形につい
て 自伝風作品について 長篇「わだつみ」
について 谷崎文学のことなど

77

5

第三部 歴史小説

歴史のなかのロマネスク 想像力とポエジー
時間と空間 歴史における小説家の領域
『蒼き狼』をめぐる論争 素材とインスピレーション
『風濤』のこと 中島敦について
興味ある時代と坐り直して書く場面 川について
仕事 歴史そのままか歴史離れか これからの

井上靖年譜

福田宏年編

井上靖主要参考文献

福田宏年編

装帧
熊谷博人

わが文学の軌跡

井上靖
篠田一士
辻邦生

第一部 青春と人間形成

四高時代の柔道部生活

篠田 井上さんの文学的出発は千葉亀雄賞受賞作の『流転』（昭和十一年）という作品とも考えられますし、また昭和二十二年に書かれた『鬪牛』というふうにも考えられますが、これはいろいろと意見が分かれるところかもしれません。いずれにしても、『鬪牛』、そしてそれに引きつづく『猟銃』が現在の井上さんの文学的なお仕事の最初の第一歩というふうに、ごく大ざっぱに考えてよろしいかと思えます。『流転』という作品もこれまた興味あるお仕事とも、ぼくはかねがね思っておりますし、それから十数年の間に毎日新聞の記者をなさってるころ、とくに学生時代から詩をたくさんお書きになっていますので、むしろこのほうも重視すべきだろうかとも考えるん

です。

井上さんをはじめ日本のほかの作家もそうなんですけれども、幼年時代、少年時代、あるいは青春間近までの自伝風作品をいろいろお書きになっておりまして、とくに厄介なことは、小説という名目でそれをお書きになっておられる。そんなことからいろんなことを読者は知っているようにだけ、しかし実際は、かえってなんにも知らないんじゃないかという疑惑——疑惑というところちょっと語弊がありますけど——も持つわけです。『あすなる物語』『しろばんば』『夏草冬澹』、それから、ごく最近一冊にまとまりました『北の海』、この一連の作品で井上さんは幼年時代、少年時代を書かれたのですが、どんな意図を持っておられたのですか。

井上 『北の海』には多少問題がありますけど、『しろばんば』『夏草冬澹』は、いちおう自分では自伝風な小説というつもりで書いてきました。

篠田 そうですね。『あすなる物語』はもう少し前で、かなり小説的な結構がはっきりしている小説ですね。

井上 『あすなる物語』はまったくの小説です。それから『しろばんば』のもう少し前の時期を書いたものに、これは小説ではないんですけど、『幼き日のこと』という随筆風自伝があります。

篠田 こんどの『北の海』は……。

井上 これは『しろばんば』『夏草冬澹』につづく時期を取り扱った自伝風の小説ですが、かな

り意識して青春小説に仕上げています。本来なら金沢の第四高等学校時代を書くべきなんです、四高時代は柔道ばかりやっております。柔道部生活を、自分の内部へ入ってその内部から書くということは非常にむずかしいことですね。なにしろ柔道ですから(笑)。それで『北の海』では受験生の目に映った高等学校の柔道部の生活を外部から書こうとしたわけです。そうなりますと、当然小説化が行われることになります。そんなわけで『北の海』は野放図な、明るい非エリート少年たちを取り扱った青春小説になりました。そのあと、四高へ入ってからの柔道部生活をもし書くとする、かなり暗いものになります。高等学校時代に済南事件で召集され、大学時代に上海事変で召集されています。先の召集のときは柔道の練習で肋軟骨を二本折っているときで即日帰郷になりましたが、まあ落ち着かない青春時代といえます。そのころ高等学校の学生は一年志願という届けをしているのが普通で、大学卒業までは兵役が延期されているんですが、わたしの場合は自分のすばらから一年志願の届けをしてなかった。それで普通に徴兵検査を受け、その結果が甲種合格の籤逃れくじのがというやつで、いちおう定員外に置かれているので、戦争でもないかぎり、まあ、兵隊生活はしなくてもすむと思っていいたんです。ところが済南事件が起こったり、上海事変が起こったり……。

篠田 昭和三年ごろですか。

井上 昭和三年の五月です。そのあと四高ではストライキがありましたね。学生がみんな左傾し

ていく時代でした。それから、三年の高専大会の直前に三年の部員全員が柔道部を退部するという事件が起きています。その前年の高専大会が終わったとき、選手の陣容がぎまみりまして、わたしが主将ということになりました。主将というのは、いちばん強いから主将という意味でもないんですが、いちおう部の主導権を持ちます。それで練習方法を改めたんですが、それがいけない。非常な問題になりました、先輩と衝突して全員退部しました。

篠田 それは前よりもゆるい練習のしかた……。

井上 結果はそうみられたんでしょうね。多少練習方法を合理的にしましたから。そうしないと、とても部員の数を確保できないんです。学生がほとんど左傾していく時代で、来年は一人も柔道部に入ってこなくなるのではないかと思われますし、また従来の練習方法にも疑問がありました。前年など強い選手が揃っているんですが、準決勝で敗れている。なにか足りないんです。従来も寝技を主にしましたが、それをもっと徹底させようと思いました。一年下の部員では、四高に来て初めて柔道着を着たというようなのを重視して、白帯だけで固めようと思いました。そしてそれぞれにたった一つの技だけを練習させた。おくり襟といって相手の背中にくっついて首をしめるのが専門の者、逆専門の者、三角じめ専門の者、とにかく一つの技だけを匕首のように持たせて、ほかはやらせないんです。練習時間は短くして、烈しくしました。それが問題になりましたね。

篠田 学校当局に問題になった……。

井上　いいえ、先輩からです。先輩がたくさん集まりまして協議した結果、三年の部員全員が退部することになりました。退部しなくてもよかったです、その時の勢いです。それですから、わたしは三年のときの高専大会には出場していません。そういう時期を、『北の海』のあとで書くのなら書くということですね。終戦後、わたしたちは全員四柔会へ復帰しましたが、そのときかつて争った先輩たちと話し合って、結局はわたしたちがやろうとしていた柔道がいちばんおもしろかったのではないかとということになりました。いま考えると、わたしたちがやろうとしていたことは、どうも柔道というようなものではありませんね。

辻　ぼくは柔道のことは知りませんが、お話だけでも壮烈な感じですね。

篠田　それはかなり苛烈な方法なんでしょうね、いまいかがいますと。白帯だけで、しかも一つの技だけを毎日毎日練習するというのは。

井上　わたしは二年のときに試合に出ましたが、そのときは二年と三年で十五人の選手団を構成しました。三年に超弩級の選手がいました。とくに三人が強かった。その当時、六高がいちばん強かったんですが、四高にその三人の選手が入ったときに、もうだめだと六高は思ったそうです。しかし、その選手たちがみんな相手を抜けなかったんです。彼らは立技も寝技も利きましたが、わたしたちは、彼らの場合、立技がごととにじゃまをしてと見たんです。それで徹底的に寝技本位に切り替えたんです(笑)。

篠田 ぼくのころは、戦争末期ですから、あつてなきがごときものでしたけれども。しかし、四高と六高の対抗試合は、全国の高等学校の柔道部では一種伝説的なものがありましたね。いろいろ名声はうかがつてゐるんです。いま柔道の話がたまたま出ましたから、ついでにもう少しうかがいたいと思いますけれども、野間宏さんが井上さんについて非常にいい文章を書いておられますね。そのなかで井上さんにおける柔道の問題、とくに柔道と文学のかかわりあい、それから井上さんは柔道のこと非常に詳しいんだけど、一度として柔道を小説のなかにお書きになつてない。いわゆる柔道小説というものも書こうと思えば書けるんじゃないかと思うんだけど、一度もお書きになつてないのはどういふことかということ、なかなか鋭い指摘をなさっていますけれども、まあ、ぼくもそういうもんかなと思ひました。その点はどうでしょうか。いまの問題と多少かかわるかと思ひますが……。

井上 いまちょつとお話したように、わたしたちのやつた柔道というのは非常に特殊なもので、いま考えれば、日本の柔道をこわしたようなものです。その柔道小説、柔道そのものを小説のなかへ取り入れた文学作品というのにはできにくいと思ひますね、実際に。他のスポーツも同じですが、柔道というものの本質は、結局のところ肉体の記憶ですからね。いまわたしが四高時代に経験したことを書けば、学生時代のわたしは書けますね。しかし柔道小説にはどうしてもならないんです。正面から柔道を書こうということはなかなかできないことですね。

篠田 そう思います、ぼくも。

井上 野間さんがそういったというのは柔道がいかなるものか知らないから(笑)。

篠田 柔道の試合は、やった人でないと見ていてもおもしろくないんですね、テレビでいくら詳しく見ても。どっちが勝ったか負けたかということはわかりませんしね。そこから考えても、描写ができませんしね。小説にはならないと思うんですね。

井上 そう思いますね。篠田さんのおっしゃるとおり、どんなすばらしい試合をしたかということとは、本人にしかわからないのです。見ていた人にはわからないんです。そのときどんなにすばらしく自分の体が瞬間に動いて、すばらしい技がかかったか。それは瞬間にパッと消えてしまいますからね。残らないんです。自分が知ってるか、もし知っているものがいるとすれば、相手一人です。

篠田 そういうことになれば、審判でも、結局、外側の形から判断するだけでしょう。たしかにおっしゃるように、自分でもあとになってそうだったかとわかるくらいでその瞬間はもうほんとうに無我夢中だけですから。

井上 そうですね。そして、ほんとうにきれいにきまったという体の姿勢も、まるで自分が知らないうちにひらめいて、そうなったということがありますね。

篠田 ありますね。

井上 でも、その瞬間に消えてしまうものですね。そして、どんな正確な記録があっても再現できない。その点は茶会と茶会記の關係に似ています。茶会記というのはいちおう正確な記録なんです。何月何日、主人がだれで、客がだれで、軸がどういうもので、道具がどういうもの、その記録はまず正確だと思ふんですが、その茶会そのものがすばらしかったかどうかということ、その正確な記録からは再現できない。同じようなことなんです。

篠田 いろんな外に表われた要素とか、陰に隠れた要素がうまいぐあいにミックスして、それが瞬間的に発するものでしょうからね。

井上 そういうものですね。とにかく青春の一時期、不思議な柔道というものに自分を賭けて、その少数の集団のなかへ入っていった。それに対する悩みもあれば、自分への問いかけもある。そういうことを書いていくのでしたら、書けますね。しかしいわゆる柔道小説なるものは書きよろがない。それをもし書くとしたら側面から見て書く以外ない。ですから受験生の目に映った四高柔道部の生活を『北の海』という小説で書こうとしたわけです。どうもそれ以外に書きようがないと思います。

篠田 いまの野間さんの柔道論なんですけど、井上さんが中学のころから柔道をなさって、中学卒業の前年ごろから飲酒、喫煙を覚えたことと結びつけて、お父様のいわゆる圧力をはねのけて自我の目ざめ、つまり、井上さんの場合は文学への道をそこでつかむという契機になってると